

道博協ニュース

第52号

発行所 平成7年(1995)9月30日
北海道博物館協会
札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

'95道博協松前大会

盛会裡に終了

平成七年度の第三十四回北海道博物館協会総会ならびに大会は、北海道の古都、渡島管内松前町の町民総合センター(松前町郷土資料館)を会場に七月の六・七日の両日、総勢百二十名余りの参加者のもとに開催されました。今年度の総会・大会は、第七回全国生涯学習フェスティバルの協賛事業の一環として、テーマも、歴史の街、松前にふさわしい「地域文化の継承と博物館」でした。本総会の一日目は、九時三十分から開会式が開かれました。松前町教育委員会の左澤昭学校教育課長の司会により、小笠原立男副会長の開会宣言、城戸崎彰会長の主催者挨拶、続いて小坂清治松前町長の全町民を代表して熱烈な歓迎の言葉がありました。祝辞は北海道教育長に代って、渡島教育局の小澤敏指導主幹と日本博物館協会徳川義寛会長(代読)、鈴木紘一副会長ともう一人、地元の松前町議会渡辺茂議長から心あたたまるお祝いの言葉が寄せられました。

総会は十時から開催されましたが、一部、日程を変更して最初に、平成七年度北海道博物館協会表彰式を挙行しました。本年度の表彰者は岩内郷土館友の会会長の庄崎之男氏と下川町文化財保護審議会会長の中内伊勢吉氏の二名でした。それぞれの表彰者の業績と経歴が紹介され、城戸崎会長から表彰状と記念品がわたされ、会場からの暖たい拍手のなかに表示式を終えました。

続いて総会に移り、第一号議案の平成六年度事業報告、二号議案の会計収支決算報告が承認されました。

次に、昨年度大会で提起された道博協の将来像を決める課題については、三号議案として、「北海道博物館協会基本問題検討委員会の設置について」として提案され、会場からも幾つかの意見が出されましたが、基本的には、今年度一年間、七名の委員のもとに、じっくり時間をかけ、明年度大会で検討結果を明らかにするという事で承認されました。四号議案の平成七年度事業計画案、五号議案の同会計収支予算案は、数字のミス等がありました。基本的には承認され、六号議案の「北海道博物館協会役員改選について」は、本年度で任期満了となるため、会場から提案された選衝委員方式による選衝の結果、別に掲げるように新役員が決まりました。最後の七号議案の次年度大会開催地は、平成八年七月上旬に道東の厚岸町で開催されることに決まり、厚岸町から参加された小野寺英樹教育長からの歓迎の挨拶をもって、午前中の予定が無事終了し、会場前で記念撮影が行われました。午後一時からの講演会は、前に道立三岸好太郎美術館に籍を置いたこともある、宮城学院女子大学井上研一郎助教授による「北海道の近世絵画について」でした。内容は蠣崎波響を中心とする松前を舞台とした近世画の業績と評価、また、それを追求する井上研一郎氏の人柄がにじみ出た松前にふさわしい講演で感銘深いものでした。午後「地域文化の継承と博物館」のテーマを中心に据え、道南地域の博物館等施設に勤務する高橋豊彦(知内町郷土資料館)、松崎水穂(上ノ国教育委員会)、久米淳之(木田金次郎美術館)、寺崎康史(今金町教育委員会)の四氏による各地の事例報告がなされ、金盛典夫氏(斜里町知床博物館館長)の司会により、パネラー同志や会場の参加者をまじえた熱心な討論が、午後五時まで続けられました。場を三階ホールに移した六時からの懇親会は、これはまた松前ならではの楽しい会で、教育委員会の皆さんが揃いの法被を着て元気にサーブスしてくれました。会場の中心には、今朝とれたばかりの本マグロ数十キログラムをはじめとして、ツブ、ウニ、ホヤ、山菜など海幸山幸の豪華な宴で一日の疲れが吹飛ばす思いでした。最後の乾盃は池田忠之道立近代美術館副館長の音頭により和やかに閉じました。第二日目の見学会は、松前城資料館、松前城発掘現場、桜資料館、松前藩屋敷と歩いての見学。各館の受付嬢は昨夜法被を着て盛りたててくれた女性職員でした。二日間の日程を和やかな笑顔で支えてくれた松前町教育委員会の皆様、本大会にありがとうございました。

(事務局長、野村 崇)

道博協松前大会に参加して

長谷山 隆 博

七月五日朝七時、松前大会に参加するため芦別を発った。JRを乗り継ぎ午後二時過ぎに濃霧の木古内に着着。そこからバスに乗り換え松前まで約二時間の旅。発掘現場を留守にして出かける心苦しさと

前日に到着。旅館に着くや、馴染みの顔ぶれに交じり、一見して大会参加者と思われる一行が続々。ここで現実に引き戻された。

六日は大会本番である。朝から少し蒸し暑かったが、晴天のもと会場の松前町民総合センターへ向かう。予定通り開会式が進行したが、松前町長の歓迎の辞には、お世辞抜きに心のこもった歓迎の意をくみ取ることができ、旅の疲れが癒された思いがした。

ながら、沿岸部の風景を楽しむ。午後四時過ぎようやく松

六日は大会本番である。朝から少し蒸し暑かったが、晴天のもと会場の松前町民総合センターへ向かう。予定通り開会式が進行したが、松前町長の歓迎の辞には、お世辞抜きに心のこもった歓迎の意をくみ取ることができ、旅の疲れが癒された思いがした。

このあと、次期開催地を厚岸町とする原案を採択し、役員改選もスムーズに進み総会を閉じた。昼食に続き記念写真撮影後、午後からは、井上研一郎氏の「北海道の近世絵画について」と題した講演を拝聴した。松前大会にふさわしい演題と興味深い内容で、翌日の施設見学では、前知識としてかなり参考になった。

このあと、次期開催地を厚岸町とする原案を採択し、役員改選もスムーズに進み総会を閉じた。昼食に続き記念写真撮影後、午後からは、井上研一郎氏の「北海道の近世絵画について」と題した講演を拝聴した。松前大会にふさわしい演題と興味深い内容で、翌日の施設見学では、前知識としてかなり参考になった。

さて、翌七日は施設見学である。地元の久保、前田両氏の懇切丁寧な案内で、松前城公園一帯の資料館や施設群を歩き見た。さすが蝦夷地の江戸、歴史の重みに圧倒されるうち、ただの観光客になっていった。それにしても、桜の管理の行き届いていることには感心させられ、ただただ地元の方々の努力に頭が下がる思いがした。



この件についての経緯がよく理解できなかった。ただ、協会として、博物館王国と呼ば

れるこの北海道において、二十一世紀に向けていかにあるべきかを模索している現状には、この業界の一人としてうなずけるものがある。従来は協会最大の目的である「道内館園相互の連携による振興・発展」に重点が置かれてきたのだから、「要領(案)」に示されたとおり、生涯学習が叫ばれる今日では、さまざま

活動の実践例が報告された。聞いているうちに、わが職場と比較して何と誠実・精力的なのだろうと感心してしまう。しかし、何と言っても、各氏が抱える苦労話については、わが事のように共鳴する部分が少ないなかった。「どこも同じ悩みを抱えているんだ」と変に納得し、少し気が楽になった。こうした論議は、大会が同業者が愚痴をこぼしあう場ではないにしても、精神衛生上まことに益するところの多いものであり、参加した意

義があったと感じている。大会すべての子定終了後は、部屋を移しての懇親会。ここでも、町長、教育長をはじめ、地元の方々の歓待を受けた。私ひとりではあるまいと思う。それと同時に、次期開催地にとってプレッシャーがかかるだろうな、などと余計な思いを巡らせてしまった。



発足十年―道北地区 博物館等連絡協議会

道北地区博物館等連絡協議会が発足して十年が経過した。会の根幹に関わる問題が総会昭和五十七年、士別市で開催された第二十一回北海道博物館大会の折、士別市立博物館、資料館が集中して、職員が集まりやすいから、時には集まって研修する機会をもつてはどうか」との提案が、道北地区からの大会参加者になされた。その後、協議会設立は頓挫をきたした。業を煮やされた士別市立博物館長は幾度か旭川郷土博物館へ来られて、協議会設立を強く訴えられ、提案から三年目の昭和六十年九月、協議会設立総会を開催することになった。以来、道北三管内の各市町村教育委員会のご厚意によって協議会総会を開催してきた。この総会で十一回を数えた。この

ことによる展示の柔軟性、展示期間などが、担当者によって話合われ、同年七月からの第一巡回展「アイヌ衣装展」の開催に漕ぎ着け、七館を巡回した。

その後、回を重ねて、昨年度の巡回展「イヌイットの生活―今と昔―写真展」は九回目開催となり、十七館を巡回した。その期間は十月間にとり及んだ。この間、巡回展に要する経費を持たない当協議会は、展示に必要なパネル・看板などを分担して作製するほか、総会後の懇親会費の残余



を貯めてきた。それにより、第五巡回展「南の貝、北の貝」から経費の予算計上が可能となり、その上、北海道博物館協会からの補助金は巡回展開催の大きな力となっている。巡回展開催の原動力は道北三管内の博物館資料館の協力であり、これが各博物館、資料館の紐帯となってきた、

資料館の紐帯となってきた、といっても過言ではない。当協議会にとっても、巡回展は活動の支柱であり、今後も各博物館資料館の協力を得て継続していきたいと考えている。資料は博物館資料館の生命であるが、これをお借りして、一年間近くも巡回することに

の発行、③道北管内の博物館資料館職員の名簿作成であるが、中には、毎年事業計画に上げられているものもある。巡回展は、九月の理事会で展示計画がたてられ、本年中には巡回が開始されるであろう。研修会は各博物館資料館職員に共通する課題を取り上げ、機関紙はこれまで幾度か発行されたが、日常業務に追われて継続発行ができなかったの

で、本年からは…名簿も職員名の羅列ではなく、各博物館、資料館の連携と活動に役立つものになりたい。いくつかの課題と懸案を抱えて、十一年目を迎えた当協議会は、十年間の反省を踏まえて、「各博物館等の充実と相互の連携をはかる」ための新たなスタートを切った、ということができる。そして「充実と相互連携」を目指して活動していくことが、各博物館資料館を利用する人びとの生涯学習に寄与できることを、確信してのスタートである。事業計画は、①第十巡回展及び研修会の開催、②機関紙

数年前から、「…博物館…ネットワーク…」と称する会議がおこなわれているが、これらに参加するたびに、「難解な詩を読んでいる」ようなもどかしさにとられるのは私だけであろうか、これらの会議の内容自体は充分な必要性を持っており、今後も継続的におこなわれていくべきものであることは間違いない。しかし、こと「ネットワーク」ということに関しては、かなり文学的な表現の粋を出していないと思う。我々自然史系の学芸員は、「道から」…博物館…ネットワーク…に関する予算が出ていない」と聞くと、すぐにインターネット対応のサーバをどこかに設置し、道内の博物館に関する情報提供をするのか？などと思ってしまう。あるいは、外国にあるような移動展に関する「館際会議」が成立し、明日にでも、一地方の小規模博物館ではおこなえないような特別展示のキャランが動き始めるのではないかと思ったりもするのである。現実の「…博物館…ネットワーク会議」では、このようなことは当分始まりそうも無い。

小規模博物館では、館の実務に密接に関係した「博物館ネットワーク」を必要としている。この「自然史系学芸員の現場から」シリーズでも、①では、保田信紀（層雲峡博物館）館長が道内の自然史博物館およびそこに働く自然史系学芸員の層の薄さを指摘し、（特に研究において）学芸員相互の協力体制が必要であることを説いている。また、②では、「誰にでもできる化石の同定」として齊木健一（元・三笠市立博物館）主任学芸員が化石の同定のしかたを略述しているが、これは①で指摘された「自然史系学芸員の層の薄さ」に対する対応のしかたの一つと考えても良い。しかし、これは博物館で起き得るすべての事件において、このように対処しても良いということではない。大原昌宏（小樽市博物館）学芸員が現生昆虫学者の立場から、

の事について補足している。齊木氏の提言の背景には、現在の博物館が抱える幾つかの問題があるのであるが、ここでは論じるスペースが無い。むしろ、北海道の博物館の学芸員として利用できる化石図鑑（現生生物についても）を、館際的に作り出して行くとか、他館の学芸員の持つ専門家としての能力を利用できる環境を作り出す必要がある。④では、宇野裕之（美幌博物館）

自然史系学芸員の現場から 『標本交換ネットワークを創ろう!! 幅・厚みのある自前の資料群をめざして』

穂別町立博物館 学芸員 地 徳 力

館に働く学芸員の専門外における関連資料の収集についての困難さ」と「多くの館の幅・厚みのない資料群」であると思われる。ここでは、他館が収蔵している様々な資料の詳細が、すぐにわかる体制を作り出す必要性を指摘したい。以前から指摘している様に、一館では不十分な資料群でも、数館の情報が明らかになることにより、充分に対応できる様になるであろう。自前の資料は持つ必要が無いと言っているのではなく、その館の専門とする資料群の収集に力を注ぎ、そうでないところは（取り敢えず）他館に任せようということである。

上記のような「博物館ネットワーク」の前段階としての活動を一つ提起したい。例えば、穂別町立博物館では化石資料の整理が進み、自館では「研究用」もしくは「普及用」には適しないうが、他館での「参考資料」としては充分に使えそうな資料がいくつも出てきている。一方で、化石貝類の研究・普及の為に必要な参考資料として、現生道内産貝類標本が不足している。海浜に存在する博物館・資料館では、地元産する貝類標本は多量に所蔵していると思われるが、これらと交換できないであろうか。また、当館の主たるテーマである海生（化石）脊椎動物の研究・普及は、現生の海生哺乳類および陸成爬虫類の骨格標本を必要としているが、ほとんど入手できていない。これらに見合う交換標本が用意できるか否かは問題であるが、可能な場合もあろう。同様なことは様々な形で潜在していると思われる。例えば、ある動物の遺体が入り、すでに自館にあるもの場合は他館へ情報だけでも提供するなどである。これらのことを管理する組織が欲しいところであるが、もし、組織的におこなえば、一対一の館同士のトレードのみならず、A館からB館へ、B館からC館へ、さらにC館からA館へといった三角方式も可能であろう。これらが可能になれば、これまでは単館では収蔵できなかった資料が、ネットワーク全体では生きることになる。

平成七年度北海道博物館協会

学芸職員研修会に参加して

菅原 美喜子

今回の研修会は「博物館と郷土学習」というテーマで、苫小牧市博物館の郷土学習授業の見学とそのパネルディスカッションが行われました。小樽市博物館には、宿泊学習や体験学習の一環として、毎年多くの学校が見学に来ます。今年になって、その子どもたちの質問に答える機会も増えました。また、三月にニューヨークランドから帰ってきた大原昌宏学芸員から、現地の博物館と学校教育との関係について話を聞いた後だったということもあり、「小学校郷土学習授業」ときいて興味津々で参加しました。



今回研修会では「博物館と郷土学習」というテーマで、子どもたちはみな活き活きとして、楽しいかきと尋ねると即「楽しい」という返事が返ってきます。上白を持ち上げ、下白の溝にたまった米粉の模様が見えたたん「うわーすごい」と歓声も上がり、「生涯にわたって楽しい学習の場として博物館に楽しむ素地を培う」という目的は達成

されている感じを受けました。しかし、「ボランティアの導入は考えているか」「先生が傍観者だった」という意見がたように、学芸員と教師が協力して行なう授業の良さがもつとでていけばよかったです。学芸員の個性がより発揮できるプログラムであれば小学生だけでなく、高校、一般の方にも対応できるものになる可能性を郷土学習はもっていると思います。郷土学習の難しさを学びました。パネルディスカッションでは、苫小牧市立澄川小学校の中路繁先生と苫小牧市博物館藤原康成学芸員より、先に見学した郷土学習の、より詳しい話が、次いで、市立名寄図書館郷土資料室鈴木邦輝学芸員より、新博物館の活動のなかで郷土学習をどのようにすすめていくか、ご自身の展望が語られました。市民が博物館に再入場してくれるような事業展開が必要で、その一つとして郷土学習をとらえるという内容に、参加者、だれもが思わず頷いたことでしょう。

鬼丸和幸学芸員からは、美幌博物館が小学校と連携して行っている自然教育授業の事例発表がありました。学芸員はここまでサポートしていきたいと明確にしている点、大変参考になりました。博物館と学校が連携して教育活動を進めていくとき博物館がするべきことはどこまでか、学校がするべきことはどこまでか、両者の領分をはっきりさせることが大切だと思いました。学校から、何か体験学習でできるものや行事があるかという問い合わせがきますが、そんなとき、館独自の教育普及講座のほかに、学校教育が利用できるプログラムの必要性を感じます。学芸員と先生の間が主導権をとって指導するのがよいのか各館から体験談が出るなど、他館の事例を少しですが知ることができたのはよかったです。

博物館と学校の連携による教育活動では、行きづまるところが学芸員と学校教師の多忙さのようです。研修会ではそれを乗り越えた事例発表が聞けることを期待していましたが、しかし、郷土学習七年目の先生から、忙しい先生もおりまして…と出てしまふ。最後は学芸員の多忙さを再認識してパネルディスカッションが終了してしまいました。それが大変残念です。研修会に参加したのは今回二度目ですが、いつも事前で学習（経験）がなく、研修の場で学び、帰ってから事後学習という状態です。昨年の「博物館のデータベースとネットワーク」についてもそうでした。コンピュータを使い、あれこれ悩む今になって、研修会での内容がこういうことだったのかと理解できます。同時にもしっかり聞いておけばよかったと後悔することもしばしばです。これから研修会で学んだことを、時間をかけてでも消化吸収していければと思います。最後にりましたが、ご準備いただきました苫小牧市博物館の方々に、心から御礼を申し上げます。

(小樽市博物館 学芸員)

館・園紹介

北海道立文書館

北海道立文書館は、昭和六十年七月、北海道の歴史に関する公私の文書等を収集・保存して、広く道民等の皆様に利用していただく施設として誕生しました。

今年七月には、開館一〇周年記念行事を行ないましたが、講演会や特別展示に、多くの人々のご参加をいただきました。

当館では、北海道の行政機



期から昭和二〇年代に及ぶ国有未開地払下関係文書等があり、私文書では、根室を根拠地として活躍した実業家柳田家の、幕末から昭和に至る文書、幕末の探検家・北海道の名付親として名高い松浦武四郎文書（マイクロフィルム）、文化年間の幕府直轄時代における阿部家文書、その他幕末から昭和にかけての多様な文書が、保存されています。

いずれも、北海道の行政・社会経済の歩みを裏付ける貴重な基本資料として、北海道史はもとより地域史の研究、個人のルーツ調査など、様々な目的に利用されています。

また、文書館資料がより能率的に的確に利用されるよう、資料やその整理保存、利用の方法、関連資料の所在や内容等について、調査・研究を行っています。様々な普及活動も行っています。

一年一回、赤れんが庁舎において開いている古文書解読講座は、大変人気があり、これは、地方においても地元施設のご協力を得て、古文書教室



の名で年二回、開催しています。

さらに、道内に存在する貴重な歴史資料が、適切に保存され利用されるよう、道内史料保存施設等の担当職員を対象に、文書等の取扱いや利用についての研修会を、開催しています。

当館業務や所蔵文書を紹介する館報「赤れんが」や各種目録等は、道内外の関係機関に送付していますが、その内、史料集・目録・研究紀要は、平成六年度から、道の情報公

開の窓口である行政情報センターで、個人にも実費頒布することになりました。

当館は重要文化財北海道庁旧本庁舎内にあり、北海道の歴史と文書等の関わりや文書館業務を紹介する常設展示室も設けられています。

北海道の歴史を尋ねて、どうぞ、お気軽にご来館ください。

◇北海道立文書館案内

開館時間 九時～十七時

休館日 土・日曜日

国民の休日及び振替休日

日

毎月第三木曜日（休日に

当たると場合はその前日）

年末年始（十二月二十八

日～一月四日）

お問い合わせ先

〒〇六〇一八八 札幌市

中央区北三条西六丁目

北海道庁赤れんが庁舎

☎〇一一―二三一―四一

一一 内線二一―四四一

FAX〇一一―二三二一

一八五一

（北海道立文書館長 大原良

一）

北海道では初めての灯台博物館が道南の楳法華村に 灯台ファミリアー博物館

(ピカリン館) オープン

楳法華村は、渡島半島の最東端に位置する純漁村で、総面積は二十四・九二㎢で北海道一面積の小さい村に全国でもめずらしい灯台博物館がオープンしました。

場所は、道南の秘境「恵山岬地区」で、周辺には水無温泉・活火山恵山・国民宿舎恵山荘・活火山恵山・それに明治二十三年十一月一日に初点灯した恵山岬灯台と太平洋の大海原を見下ろす恵山岬灯台公園の中にあります。



ています。

(1)「灯台のころとかたち」

— 恵山のはじめの灯台 —
初代から現在の恵山岬灯台を中心に灯台のしくみ・はたらき・それらを支えてきた様々な人や事柄などを紹介し、「ともそうはじめての灯」と題して、初代恵山岬灯台復元模型(1/4)を展示し、来観者自ら灯をとることが出来る仕組みで、同時に明治二十三年十月一日初点灯時の夜空に当夜の星座が再現されます。又、光の灯台では、リズムを使って屈折の実験・音の灯台では、現在使われている有名灯台の霧笛が体験できます。

(2)「灯台と楳法華の自然」

— 恵山岬灯台と人と自然のかわり —
現在の恵山岬灯台を中心とした海側と山側を表現したジオラマ模型による楳法華の自然等全体像を紹介し、映像ミニシアターによる「人と灯台と楳法華の自然」を題材に、「鳥の目」から見た岬の自然、海山の四季、人々の生活、灯台とそれを守る職員の姿がナレーションで構成されています。

— ションで構成されています。 —
その他解説パネルによる恵山岬の自然等の紹介、クイズ形式の参加型什器等を使って紹介しています。

(3)「灯台の光と影」

— 日本と世界の灯台の起源や、あゆみをエピソードや社会情勢を交えて紹介し、灯台の始まり、日本の灯台の歴史、世界の灯台の歴史等解説パネルにより紹介しております。なかでも、恵山岬灯台の生活史のコーナーでは、恵山岬灯台に勤務された人々の灯台生活を中心とした当時の写真や関係資料等が展示紹介しております。

— 道南にお越しの際は、ぜひお立ち寄り下さい。 —

〈灯台ファミリアー博物館案内〉

場 所／亀田郡楳法華村字 恵山岬八十番地の九 恵山岬灯台公園内
交 通／JR函館駅より車で六十分
函館空港より車で四十五分
開館時間／午前九時十五分～午後五時
休館日／毎週月曜日(祝日のときはその翌日)但し、五月・八月無休
年末年始(十二月三十一日～一月五日)
入館料／一般 四〇〇円 (三〇〇円)
小・中・高校生 二〇〇円 (一五〇円)
幼児 無料 () 団体 (十名)
お問い合わせ先／当館(灯台ファミリアー博物館) ☎〇一三八八六二二一五 FA X〇一三八八六二二一〇
(灯台ファミリアー博物館 館長 佐々木 満雄)

米マサチューセッツ州内

博物館との交流を提案!!



あることなので、いかがなものかという趣旨です。積極的に仲介等をしてくれるようですので、希望館は事務局まで連絡下さい。

館・園のおもな事業

十月〜十二月

●北海道立文学館

9・23〜11・3 「開館記念特別展・北の夜明け(海峡を越えた探検家・紀行家たち)」9・23〜3・31 「常設展北海道文学の流れ」

●札幌市豊平川さけ科学館

10・1〜11・30 「シロザケの産卵行動の展示」

●道立近代美術館

10・7〜11・26 「李王明時代の刺繍と布」10・7〜1・28 「北のトボス・四人の原風景(岩橋英遠・神田日勝・木田金次郎・砂澤ヒツキ)」

●北海道開拓記念館

8・29〜11・3 「ライマン・

コレクシオン展」明治初期の北海道とマサチューセッツ州の交流 11・10〜12・15 テーマ展「歴史的建造物の復元保存」

●北海道開拓の村

10・10〜29 「第13回児童絵画展」11・12月毎週土・日・祝 「伝統遊具づくり」

●道立三岸好太郎美術館

10・14〜12・3 「魅惑の婦人像―三岸好太郎の女性表現」

●道立函館美術館

10・7〜11・5 「横山大観―海・山・空の世界」11・11〜12・22 「蛭子善悦展」

●道立文書館「古文書教室」

10・14〜15留萌市、10・28〜29八雲町

●黒松内町ブナセンター

11・1〜19 企画展「世界の鉱物・宝石」

●小樽市博物館

自然科学講座「きのこ展」

●士別市博物館

11・25〜12・10 「なつかしの音展」

●道立旭川美術館

10・21〜29 「現代の書―北

の群像―」11・3〜12・17 「小熊秀雄/村山陽一/丹野利雄―夭折の画家たち―旭川編」

平成七年度新役員名簿

平成七年度総会で以下の役員が決まりました。任期は二年間です。

●会長 城戸崎 彰(北海道開拓記念館館長) 副会長 池田忠之(道立近代美術館副館長) 同 小笠原立男(釧路市立博物館館長) 同 佐藤一夫(苫小牧市博物館館長) 同 福井正繼(札幌市円山動物園園長)

●理事 青木隆夫(夕張市石炭博物館館長) 同 石谷善吾(帯広百年記念館館長) 同 今井信一(札幌市青少年科学館館長) 同 及川壯一(北海道開拓の村専務理事) 同 金盛典夫(斜里町立知床博物館館長) 同 黒崎康雄(浦河町郷土博物館協議会会長) 同 郷土博物館協議会会長) 同 沢田静憲(江差町郷土資料館館長) 菅原繁昭(市立函館博物館館長) 同 杉浦重信(富良野市郷土館係長) 同 鈴木

●監事 久保勝範(北網圏北見文化センター館長) 同 田中良吉(滝川市美術自然史館館長)

●事務局長 山丸和幸(アイヌ民族博物館館長)

事務局日誌

(七月〜九月)

7・6〜7 第34回北海道博物館協会総会・大会(於松前町町民総合センター)

7・20 第一回道博協基本問題検討会(於女性プラザ)

9・20 第二回道博協基本問題検討会(於札幌市職員研修センター)

9・26、27 平成七年度道博協芸芸職員研修会、テーマ「博物館と郷土学習」(於苫小牧市博物館)

11・3〜12・17 「小熊秀雄/村山陽一/丹野利雄―夭折の画家たち―旭川編」

北海道と姉妹提携を結んでいるマサチューセッツ州との五周年を記念して道開拓記念館で開かれている「ライマン・コレクシオン展」のオープニングセレモニーに参加したデビッド・C・ナツ博士(マサチューセッツ州・北海道姉妹交流協会会長)から、北海道博物館協会の城戸崎 彰会長に対し、次のような提案がありました。

現在、マサチューセッツ州には、約二〇〇の博物館がある。各種の館種があり、また規模も大きさまでである。北海道と姉妹提携をしているマサチューセッツ州の博物館同士が交流することは意義が